

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370733

研究課題名(和文) 日本語話者と英語話者の質問行為の対照研究

研究課題名(英文) A Contrastive Study of Question-Asking in Japanese and English

研究代表者

植野 貴志子 (Ueno, Kishiko)

東京都市大学・その他部局等・講師

研究者番号：70512490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、質問行為を相手の発話を聞いて反応する「聞く行為」の一部として位置付け、日本語とアメリカ英語の「教師と学生」および「学生同士」の会話における質問行為を分析した。日本人の質問は、教師が学生の話膨らませるように問いかけるなど、相手との社会的役割関係に応じて用いられるのに対して、アメリカ人の質問は、情報や意見を引き出しあうことで相互の対等性を維持するように発せられる。英語コミュニケーション教育においては、日英語の異なる会話スタイルへの理解を促し、質問など積極的な反応を用意する聞き方を訓練する必要がある。

研究成果の概要(英文)：This study examines question-asking in terms of the listener's reaction to the speaker as observed in Japanese and American English dyadic conversations between teacher-student and student-student pairs. I argue that the use of questions by Japanese speakers can be attributed to their relationally defined roles that are compatible with the role expectations in Japanese society. In contrast, American questioning reflects individuals' attempts to maintain equal relationships. I thus claim that Japanese learners of English need to acquire knowledge about the conversational styles of their own culture as well as those of other cultures and cultivate a listening attitude that produces active reactions, including question-asking.

研究分野：社会言語学・語用論

キーワード：質問行為 聞き手行動 日英対照研究 談話分析 異文化コミュニケーション 英語教育

1. 研究開始当初の背景

「日本人は質問をしない」という指摘が異文化接触場面でなされてきた。質問をしないということは、対話の活性化が望めないことを意味し、日本人に対する否定的な評価につながりうる。日本人が質問をすることに消極的である理由として、比較文化論や異文化コミュニケーション論の立場から、「察し」、「遠慮」等、日本人の行動における文化的志向が挙げられてきた。しかし、言語使用を扱う語用論、社会言語学等において、この問題に正面から取り組んだ研究は殆ど行われていない。

研究代表者は、数年来、文化の異なりが言語使用にどのように反映するのかを研究する異文化語用論の立場から、会話における質問行為に注目して、日本語と英語の談話を研究してきた(植野 2011 他)。その結果、質問するという普遍的な行為にあっても、日本語と英語で実態が大きく異なることが分かってきた。異なりの一つとして、相手の話を聞いたうえで意見を求める質問が、英語会話にのみ目立って起こることが挙げられた。なぜこのような質問が日本語では起こりにくいのか。この疑問に答えるためには、相手の話をどのように聞き、どのように反応を返すか、という聞き手としての構えや行動を含んだ「聞く行為」の観点から、質問行為を分析する必要があるのではないかと考えるに至った。

質問行為に関する先行研究からは、質問には、談話を前に進めるといった談話展開機能、興味や関心を表す等の対人機能があること(Tannen 1984)、さらに「質問と答え」の隣接対の第一発話を発することで、後続の発話内容に限定を及ぼしながら会話の方向を決定づける働きがあることが指摘されている(Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)。一方、聞き手行動に関する研究は、その多くが、あいづち(「うん」「uh-huh」等)を対象としてきた。あいづちの日英対照研究からは、日本語では、英語の約 2.9 倍の頻度であいづちが打たれることが報告されている(メイナード 1992)。これらの先行研究が示唆するのは、質問行為については、相手の発話を聞いて、いかに質問を発するかという過程が不問にされていること、また、聞き手とは、専らあいづちを送りながら相手の話の継続を支持する存在であるという前提である。

語用論は、話し手が「ことばをもって、いかにしてことをなすか」という発話行為論(Austin 1962)に始まり、質問行為を主体の能動的な発話行為の一つとして捉えてきた。しかし、会話における質問は、相手の発話を聞き、何らかの疑念を抱き、その疑念を解消するよう働きかける相互行為である。質問行為を探るためには、相手の発話をいかに聞き、いかに反応を返すかという聞き手としての行動も視野に入れる必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、質問行為を、相手の話を聞いて反応する「聞く行為」の一部と位置付けて、日本語と英語の自然談話における質問行為を分析し、日本語話者と英語話者の質問行為の型を顕在化するとともに、「日本人は質問をしない」という指摘の背景を考察する。さらに、得られた結果を、異文化コミュニケーション教育としての英語教育の基礎研究として活用することを目的とする。

3. 研究の方法

「ミスター・オー・コーパス」(参照：井出・藤井 2014)に収録された日本語とアメリカ英語の女性母語話者二名(初対面の教師と学生、および、親しい学生同士)の会話をデータとする。会話者には「びっくりしたこと」について自由に話すよう指示が与えられている。

以下を課題として、データを観察した。(1)相手の話をどのように受け、どのように質問しているか、(2)質問行為は、会話者間の社会的関係によってどのような影響を受けるか、(3)日本語と英語の質問の型はどのように特徴付けられるか、(4)異文化接触場で、なぜ「日本人は質問をしない」という指摘が生じるのか。

4. 研究成果

3年間を通して、(1)日英語会話における質問行為の特徴を明らかにし、考察を深めることができたこと、(2)(1)の成果を英語教育に生かす試みへと発展させることができたこと、(3)ワークショップを他の研究プロジェクトと共催したこと、が大きな成果として挙げられる。以下にこれらについて報告する。

(1) 質問行為の分析・考察

日本人の教師・学生の会話において、教師は学生の約 2.3 倍の頻度で質問を用い、学生の話題を膨らませ、展開を促すように働きかける。教師の質問に特徴的に観察されたのは、話題を提案したり、学生の発話のその先を先取りして話を補完するように問いかけたり、インタビューのように連続的に問いかけ、答えを引き出しながら話題を拡張したりする働きかけであった。教師の質問の多くは、情報や考えを引き出すというよりも、学生の話に寄り添い、学生を話しやすい方向に導くものである。一方、学生は、教師の働きかけを受け入れるとともに、教師に対しては、話の方向を大きく左右するような質問を控える傾向にある。

日本人の学生同士の会話では、教師・学生会話の約 2.4 倍の頻度で質問が用いられる。質問は、経験談を語る側、受ける側の双方から発せられ、話題への引き込み、入り込みが起こる。同時に、繰り返し、先取り、相手の発話に強く関連することを追加する「付け加

え)、言い重なり等、互いを引き込みあい、同調の高まりとして現れるものと考えられる「相互引き込み発話」が起こり、二者が融合的に一つの話の流れを作り出す。

以上のように、日本人の質問行為には、初対面の教師と学生、親しい学生同士という社会的関係が大きく作用している。教師と学生の間には、導く側/導かれる側という相補的な役割関係が対象依存的に認識され、それに応じた質問行為が行われる。親しい学生同士では、遠慮のない、自他融合的な関係が反映した質問行為が行われる。

アメリカ人の質問は、初対面の教師と学生、親しい学生同士という異なる社会的関係によって、日本人ほど大きな影響を受けない。学生同士の会話には教師・学生会話に比べて約 1.5 倍の頻度の質問が観察されたが、いずれにおいても、対等に、詳細を引き出す、発話意図を明確化する、見解を求める等、各々の意思に基づいた自己発信的な働きかけが行われている。特に教師・学生会話では、しばしば相互に見解を求める質問が用いられる。このことは、教師と学生が互いを独立した存在として認識し、考えを表明する機会を与え合うことで、そのあり方を尊重していることを示している。学生同士の会話には二者の関与が非常に高いやりとりもあるが、それでも、日本語会話に見られたような融合的なやりとりは殆ど起こらない。

日英語の初対面の教師と学生(疎・上下)の会話、および、親しい学生同士(親・同等)の会話における質問行為の分析結果を、自己構造の観点から考察した。日本人の自己構造は、脆い殻に包まれた自己を中心として、ウチ・ソト・ヨソの三重構造(Barnlund 1975)になっている。それぞれの領域の境界の壁が厚く、自己構造のどの領域で相手と付き合うかで異なる行動がとられる。日本人の教師と学生はソトの領域で付き合い合っていて、そこでは社会的役割関係をわきまえた言語行動が行われる。親しい学生同士はウチの領域にあり、脆い殻で囲まれた自己は他者と融合したかのように行動する。一方、アメリカ人は自己の周りの殻だけが厚く、状況に依らない実体としての自己を保っている。質問行為には、話者が属する社会文化で共有された自己構造に基づく自他認識が現われている。この社会文化的認識は、人々の関係性を構成し、人々の言語使用に影響を与え、文化を形づくっていると考えられる。

(2) 英語教育への活用

質問行為の日英対照から得られた結果を英語教育に活用する試みについて、2014 年、日本英語教育学会第 44 回年次研究集会で、2015 年、同学会第 45 回年次研究集会で発表したことは、研究成果を異文化コミュニケーション教育としての英語教育に生かすための第一歩となった。

日本人の質問は、教師が導き学生が導かれ

るという相補的な関係性の中でなされており、アメリカ人の教師と学生が対等に意見や情報を引き出しあうやりとりとは性質を異にする。このことは、日本人にとって当たり前前の質問の仕方が、アメリカ人にとっては、必ずしも当たり前ではないことを示しており、「日本人は質問をしない」という指摘の背景の一部をなしていると考えられる。英語教育においては、自文化の会話スタイルへの自覚と他文化の会話スタイルへの理解を促すこと、質問など積極的な反応を用意する聞き方を訓練することにより、日本語と英語の異なる会話スタイルを意識的に行き来できる力を育成する必要があることを指摘した。

(3) ワークショップ共催

2015 年 3 月、ワークショップ「リスナーシップとその役割の諸相をめぐって」を難波彩子氏(岡山大学)と共催したのに続き、2016 年 1 月、ラウンドテーブル「<聞く・聴く・訊く>こと 聞き手行動の再考」を、村田和代氏(龍谷大学)、難波彩子氏(岡山大学)と共催した。それぞれ二日間にわたり、複数の研究者による研究発表を行った。質問行為を含む聞き手の行動について知見を広めることができた。

<引用文献>

Austin, J. L., Clarendon Press, How to Do Things with Words, 1962

Barnlund, D. C., Simul, Public and Private Self in Japan and the United States, 1975

井出祥子・藤井洋子(編)くろしお出版、解放的語用論への挑戦:文化・インターアクション・言語、2014

メイナード・K・泉子、くろしお出版、会話分析、1992

Sacks, H., E. A. Schegloff & G. Jefferson. A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation, Language, 50 (4), 1974, 696 - 735

Tannen, D., Oxford University Press, Conversational Style: Analyzing Talk among Friends, 1984

植野貴志子、日英語会話における疑問表現の社会言語学的考察 英語コミュニケーション教育のために、日本女子大学大学院文学研究科紀要、第 17 号、2011、1 - 15

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者および連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

植野貴志子、融合的談話の「場の理論」による解釈、待遇コミュニケーション研究、査読有、13、2016、18 - 34

植野貴志子、リスナーシップから見た自他認識 日・米語会話の比較、第18回日本語用論学会論文集、査読無、第11号、2016、(ページ未定)

Ueno, Kishiko, Review, Senft, Gunter (2014) Understanding Pragmatics, English Linguistics, 査読有, 32(2), 2015, 454 - 465

植野貴志子、教師・学生間会話における質問行為の日英比較 グローバル人材を育成する英語教育のために、日本英語教育学会第44回年次研究論文集、査読有、巻無、2015、1 - 8

植野貴志子、日本人の問いかけ発話に反映する自他の認識 英語との対照を交えて、日本認知言語学論文集、査読無、第15巻、2015、709 - 714

植野貴志子、「使える英語力」育成の試み「キャリア・イングリッシュ」における実践、東京都市大学教育年報、査読無、第25号、2015、147 - 151

〔学会発表〕(計13件)

Ueno, Kishiko, An Interpretation of Merging Discourse in Terms of Ba Theory, The 3rd International Workshop on the Linguistics of BA, 27 March, 2016, Waseda University, Tokyo

植野貴志子、日英語の語りに対する共感的理解の様態 解放的語用論の視点、社会言語科学会第37回大会シンポジウム「異文化理解のための解放的語用論」、2016年3月19日、日本大学(東京)(招待)

植野貴志子、融合的談話における聞き手のはたらき「場の理論」による解釈、ラウンドテーブル「<聞く・聴く・訊く>こと 聞き手行動の再考」、2016年1月23日、龍谷大学(京都)

植野貴志子、リスナーシップから見た自他認識 日・米語会話の比較、日本語用論学会第18回大会ワークショップ「リスナーシップとアイデンティティ 異文化とジェンダーの視点」、2015年12月5日、名古屋大学(愛知)

植野貴志子、語りに対する共感的理解の提示 日・英語の女性友人同士会話の比較分析、日本英語学会第33回大会ワークショップ「日英談話比較研究の英語教育への貢献」、2015年11月21日、関西外国語大学(大阪)

Ueno, Kishiko, Speaking as Parts of a Whole: Wakimae Utterances in Japanese Conversation, The 2nd International Workshop on the Linguistics of BA, 4 July, 2015, Hakodate Future University, Hokkaido

植野貴志子、語りに対するリスナーシップ 日英語会話比較、ワークショップ「リスナーシップとその役割の諸相をめぐっ

て」、2015年3月21日、岡山大学(岡山)
植野貴志子、基礎的英語力から使える英語力を引き出す試み 眠った語彙・文法の活性化と社会言語学的・語用論的知識の教授、日本英語教育学会第45回年次研究大会、2015年3月7日、早稲田大学(東京)

植野貴志子、日本人の問いかけ発話に反映する自他の認識 英語との対照を交えて、日本認知言語学会第15回大会、2014年9月20日、慶応大学(神奈川)

植野貴志子、日本人の問いかけ発話に見られる役割認識と場 日英語の対照を通して、第7回場の言語・コミュニケーション研究会、2014年6月28日、早稲田大学(東京)

Ueno, Kishiko, Questions in Japanese and American English Teacher-Student Conversations: Role Oriented Wakimae Utterances vs. Individualistic Volitional Utterances, Sociolinguistic Symposium 20, 16 June, 2014, Jyväskylä, Finland

植野貴志子、日本人とアメリカ人の質問行為 グローバル人材を育成する英語教育のために、日本英語教育学会第44回年次研究集会、2014年3月2日、早稲田大学(東京)

植野貴志子、日本語話者と英語話者の聞き手行動 ミスター・オー・コーパスに基づく一考察、社会言語科学会第32回大会、2013年9月7日、信州大学(長野)

〔図書〕(計1件)

植野貴志子、くろしお出版、問いかけ発話に見られる日本人の先生と学生の社会的関係 日英語の対照を通して、井出祥子・藤井洋子(編)、解放的語用論への挑戦、2014、91 - 122

6. 研究組織

研究代表者

植野 貴志子 (UENO, Kishiko)
東京都市大学・共通教育部・講師
研究者番号：70512490